

大学生の職業人イメージ及び自己未来イメージが、 キャリア意思決定に与える影響

山田 智之*

(平成30年9月3日受付；平成30年11月29日受理)

要 旨

本研究は、日本の大学生の職業人イメージや自己未来イメージがキャリア意思決定に与える影響について検討したものである。本研究の結果、ポジティブな職業人イメージ（理想的職業人イメージ・当為的職業人イメージ）は、キャリア意思決定（決定不安・不決断・モラトリアム）を低下させ、ネガティブな自己未来イメージ（現実的未来自己イメージ）はキャリア意思決定（決定不安・不決断・モラトリアム・逃避・障害不安）を促進させる傾向が明らかになった。以上のことから、適切なキャリア意思決定を行うためには、職業人イメージや自己未来イメージを適切に実感させることができるようなキャリア教育の取り組みが重要であることが示唆された。

KEY WORDS

職業人イメージ 自己未来イメージ キャリア意思決定

1 問題と目的

文部科学省（2004）は、日本の子どもの現状について、学ぶことの意義について身をもって体得したり、社会生活や将来の職業生活における必要性や有用性などを認識したりすることが十分にできないことを指摘している。このような日本の子どもの現状を解決するために、文部科学省（2004）は発達段階に応じたキャリア教育の重要性を強調している。そして、中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」では、教育界から産業界へと生涯にわたる円滑なキャリア発達を目指したキャリア教育の必要性が示され、幼稚園から大学段階において、キャリア教育が育むべき能力として、基礎的・汎用的能力を示している（文部科学省、2011）。

このような能力を育むためには、子どもたちが将来の社会生活や職業生活をより明確にイメージできることが重要である。イメージとはDenis（1989 ドゥニ他訳 1989）によれば、知覚を能動的に再構築したものである。また、心的イメージは創造的な思考に重要な役割を果たすものである（Shepard, 1978）。このことから、職業人や自分の未来を明確にイメージできることは、職業選択を控えた大学生に影響を与えていることが考えられる。

山田（2009）は、中学生を対象とした社会人へのイメージに関する研究において、教育進路成熟と人生進路成熟が高い場合、疲れた社会人像のイメージとの関連が低くなることを明らかにし、社会人イメージと進路成熟に関連性があることを示唆している。また、上瀬（2008）は、大学生の社会人・サラリーマンに対するステレオタイプに関して検討を行った結果、大学生が社会人に対して示した感情は、同情・哀れみ・軽蔑などが中心であり、尊敬や称賛を示す肯定的な評価は3割程度であることを明らかにしている。

一方、自分の将来に対するイメージに関連する研究としては、松田（2007）が大学生を対象に自分の未来イメージを9分割統合絵画法によって検討し、将来に対する不安が少ない者の方が過去を受容し将来に希望をもち現在の生活に充実感を感じる傾向が強いことを明らかにしている。さらに、男性は未来を現実的かつ義務としてイメージする傾向があり、女性は理想や願望としてイメージする傾向があることを指摘している（松田、2007）。また、山田（2013）は中・高・大学生を対象に4分割描画法を用いて自分の未来イメージを検討し、20～40歳、40～60歳といった就業年齢段階の未来イメージについては、学校段階が高くなるにつれてポジティブなイメージが減少し、認識不可能が増加することを明らかにしている。そして、女子学生においては特性的自己効力感が高いほど20～40歳の自分の未来にポジティブなイメージを抱くことを指摘している。また、山田（2016）は労働者や家庭人に関連したライフキャリアイメージを基本に自分の将来が描けるようなキャリア教育の取り組みの重要性を指摘している。

このように、近年では、社会人や職業人に対するイメージに関する研究が様々に行われるようになった。しかしながら、職業人や自分の未来イメージと職業選択との関連性に関する研究は希少である。職業人や自分の未来イメージ

*学校教育学系

を厳密な測定によって捉え、職業選択との関連性を検討しておくことは、今後のキャリア教育を工夫していく上で重要なことである。そこで、本研究では職業人や自分の未来イメージが職業選択を控えた大学生のキャリア意思決定に与える影響について検討をする。

2 方法

本研究は、予備調査と本調査によって行われた。予備調査は、職業人イメージと自分の未来イメージ尺度を独自に作成するために必要な「職業人に対するイメージ」や「人間の表情」をとらえるために質問紙による自由記述法を用いて行われた。当該の調査は2015年7月に関東地方の大学生20名（男子学生：10名，女子学生：10名）及び甲信越地方の大学生20名（男子学生：10名，女子学生：10名）に行った。

本調査は、独自に作成した職業人イメージと自分の未来イメージ尺度、キャリア意思決定尺度（清水・花井，2007，2008）¹を用いたインターネットによるWEB調査によって行われた。当該の調査は2015年の9月～11月に大学生200名を対象に実施した。本調査の結果，168名（大学生：103名，大学院生：65名）の学生から回答がありこれを分析対象とした（有効回答率84%）。被調査者の学校段階と性別，学部学系，学校の所在地等は表1に示すとおりであり，男子学生：83名，女子学生：85名であった。

3 結果

3.1 予備調査：職業人のイメージ尺度の作成

職業人のイメージ尺度の作成にあたっては、予備調査において関東地方の大学生20名（男子学生：10名，女子学生：10名）及び甲信越地方の大学生20名（男子学生：10名，女子学生：10名）に職業人についてもっているイメージを自由に記述させた。その結果153語の職業人イメージに関連する語句が抽出された。そして，抽出された職業人イメージに関連する語句について「自立した，自律した，自立している，自律している，心理的に自律している，経済的に自立している，社会的に自立している」などの語句を「自立している」，「疲労，疲れ切っている，つかれている，心理的に疲労している，精神的に疲労している」などの語句を「疲れている」といったようにすべての語句を取りまとめ，16語（自由な，多忙な，大変な，働いている，苦勞している，責任のある，疲れている，楽しそうな，頑張っている，しっかりしている，ストレスのある，通勤している，収入のある，テキパキしている，自立している，その他）に整理した。そして，整理された語句について，豊田（2011）が示した理論的サンプリングにおける理論的飽和度を求める方法を用い，95%信頼区間の上側限界を利用した捕獲率を計算した。その結果，捕獲率（ $Cr = .912$ ）は高い値を示しており，理論的に飽和し，十分に信頼できるサンプリングと考えられた。

そして，整理された16語の中から職業人イメージとしてもっともあてはまる語を1つ，選んだ職業人イメージにもっともあてはまる自己概念（現実自己・理想自己・当為自己）（Higgins, 2009）を1つ選ばせ，これを職業人イメージ尺度とした。

3.2 本調査：職業人のイメージの分析

本調査における職業人イメージ尺度を用いた結果について，職業人イメージと自己概念（現実自己・理想自己・当為自己）（Higgins, 2009）の関係を探索的に検証するために距離測定 χ^2 によるコレスポネンス分析を行った。その結果，大学生の職業人イメージと自己概念に関する19の項目は，2次元（1次元の特異値=.490，2次元の特異値=.348）に要約され，1次元と2次元において行と列の関係が十分に強く，職業人イメージによって自己概念に相違があることが示された（ $\chi^2 = 60.633$, $df = 30$, $p < .001$ ）。また，1次元の固有値=.240（イナーシャの寄与率=.664），2次元の固有値=.121（イナーシャの寄与率=.336）となり，2つの次元でのイナーシャの寄与率の累積が1.000であったことから，コレスポネンス分析の結果は概ね妥当と考えられる。

そして，職業人イメージ（行）と自己概念（列）の同時配置図（図1）から，職業人イメージの分類においては1次元，自己概念の分類においては2次元が明確であり，イナーシャの寄与率が1次元の方が高かったことから，職業人イメージを中心に3つのグループに分類し職業人イメージとした。第1のグループは，職業人イメージ（自由な，楽しそうな，頑張っている，収入のある，その他）と自己概念（理想自己）がまとまってポジティブなイメージのグループであり，これを「理想的職業人イメージ」とした。第2のグループは，職業人イメージ（多忙な，大変な，働

表1 被調査者の属性

		度数	%
学校段階	大学生（1年生）	2	1.19
	大学生（2年生）	43	25.60
	大学生（3年生）	58	34.52
	大学生（4年生）	0	0.00
	大学院生（修士課程1年生）	49	29.17（内社会人大学院生4名 2.38%）
	大学院生（修士課程2年生）	16	9.52（内社会人大学院生2名 1.19%）
	合計	168	100.00
性別	男性	83	49.40
	女性	85	50.60
	合計	168	100.00
学部学系	人文科学系統 （文学・史学・哲学・心理学など）	12	7.14
	社会科学系統 （法学・政治学・商学・経済学・社会学・経営学など）	8	4.76
	理学系統 （数学・物理学・化学・生物・地学など）	7	4.17
	工学系統 （機械工学・電気通信工学・土木建築工学・応用化学・経営工学など）	1	0.60
	家政系統 （家政学・食物学・被服学・住居学・児童学など）	3	1.79
	教育系統 （教育学・体育学など）	125	74.40
	芸術系統 （美術関係・デザイン関係・音楽関係・演劇関係・写真関係など）	12	7.14
	合計	168	100.00
学校の所在地	北海道・東北 （北海道・青森県・岩手県・宮城県・秋田県・山形県・福島県）	2	1.19
	関東1 （茨城県・栃木県・群馬県）	2	1.19
	関東2 （東京都・埼玉県・千葉県・神奈川県）	23	13.69
	甲信越 （新潟県・長野県・山梨県）	130	77.38
	北陸 （富山県・石川県・福井県）	7	4.17
	東海 （岐阜県・静岡県・愛知県）	1	0.60
	近畿 （滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県・三重県）	2	1.19
	九州・沖縄 （福岡県・佐賀県・長崎県・熊本県・大分県・宮崎県・鹿児島県・沖縄県）	1	0.60
	合計	168	100.00

いている、苦労している、疲れている、ストレスのある、通勤している）と自己概念（現実自己）がまとまったネガティブで無動機的なイメージのグループであり、これを「現実的職業人イメージ」とした。第3のグループは、職業人イメージ（責任のある、しっかりしている、テキパキしている、自立している）と自己概念（当為自己）がまとまった職業人としてあるべき姿に関連したポジティブなイメージのグループであり、これを「当為的職業人イメージ」とした。

3.3 予備調査：未来自己イメージ尺度の作成

自己未来イメージ尺度の作成にあたっては、予備調査において関東地方の大学生20名（男子学生：10名，女子学生：10名）及び甲信越地方の大学生20名（男子学生：10名，女子学生：10名）に人間の表情として考えられものを表す語句を自由に記述させた。その結果138語の表情に関連する語句が抽出された。そして、抽出された表情に関連する語句について「喜び、笑顔、にっこり、笑い」などの語句を「喜び」、「無表情、表情なし、喪失感、ぼーっとした

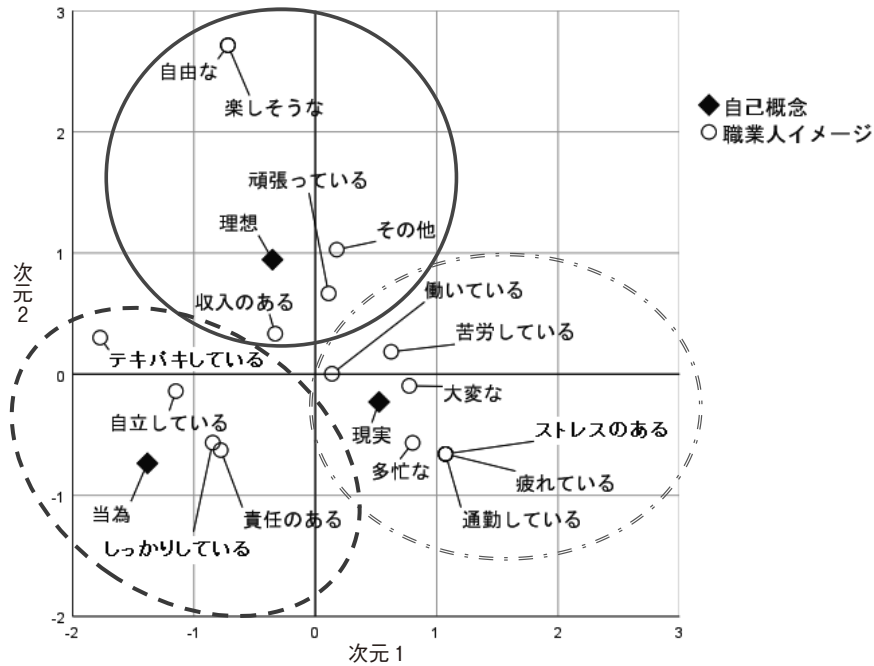


図1 職業人イメージ（行）と自己概念（列）の同時布置図

顔」などの語句を「無表情」, 「ほっとした表情, 安心した表情, 安堵感ある顔」などの語句を「安堵」といったように、記述された表情に関連する語句をEkman and Friesen (1975 工藤訳1987) が明らかにした6つの情動に対する表情（喜び, 悲しみ, 驚き, 怒り, 嫌悪, 恐れ）, Ekman and Friesen (1975 工藤訳1987) の表情に2つの表情を加えた8つの情動に対する表情（喜び, 悲しみ, 驚き, 怒り, 嫌悪, 恐れ, 真剣, 無表情）（山田, 2013）を基本に、「安堵」「疲労」「緊張」「その他」を加えた12語の表情に関連する語句に整理した。そして、集められた語句について、豊田（2011）が示した理論的サンプリングにおける理論的飽和度を求める方法を用い、95%信頼区間の上側限界を利用した捕獲率を計算した。その結果、捕獲率（ $Cr = .863$ ）は高い値を示し、理論的に飽和しており、十分に信頼できるサンプリングであると考えられた。

そして、整理された12語の表情に関連する語句の中から自分の未来の表情としてもっともあてはまるものを1つ、選んだ表情にもっともあてはまる自己概念（現実自己・理想自己・当為自己）（Higgins, 2009）を1つを選ばせ、これを自己未来イメージ尺度とした。

3. 4 本調査：自己未来イメージの分析

本調査における自己未来イメージ尺度を用いた結果について、表情と自己概念（現実自己・理想自己・当為自己）（Higgins, 2009）の関係を探索的に検証するために距離尺度 χ^2 によるコレスポンデンス分析を行った。その結果、自分の未来の表情と自己概念に関する15の項目は、2次元（1次元の特異値 = .725, 2次元の特異値 = .295）に要約され、1次元と2次元において行と列の関係が十分に強く、自分の未来の表情によって自己概念に相違があることが示された（ $\chi^2 = 102.971, df = 22, p < .001$ ）。また、1次元の固有値 = .526（イナーシャの寄与率 = .858）, 2次元の固有値 = .087（イナーシャの寄与率 = .142）となり、2つの次元でのイナーシャの寄与率の累積が1.000であったことから、コレスポンデンス分析の結果は概ね妥当と考えられる。そして、自分の未来の表情（行）と自己概念（列）の同時布置図（図2）から、自分の未来の表情においては1次元、自己概念の分類においては2次元が明確であり、イナーシャの寄与率が1次元の方が高かったことから、自分の未来の表情を中心に2つのグループに分類し自己未来イメージとした。第1のグループは、自分の未来の表情（安堵, 喜び, 怒り）と自己概念（理想自己）がまとまったポジティブで能動的なイメージのグループであり、これを「理想的自己未来イメージ」といた。第2のグループは、自分の未来の表情（悲しみ, 無表情, 恐れ, 嫌悪, 疲労, 緊張, その他）と自己概念（現実自己）がまとまったネガティブで受動的なイメージのグループであり、これを「現実的職業人イメージ」といた。また、自分の未来の表情（真剣）については、3つの自己概念（理想自己・現実自己・当為自己）の中間的な位置にあり、自分の未来の表情（驚き）についても、2つの自己概念（理想自己・当為自己）の中間的な位置であったことから、グループ化するに至らなかった。

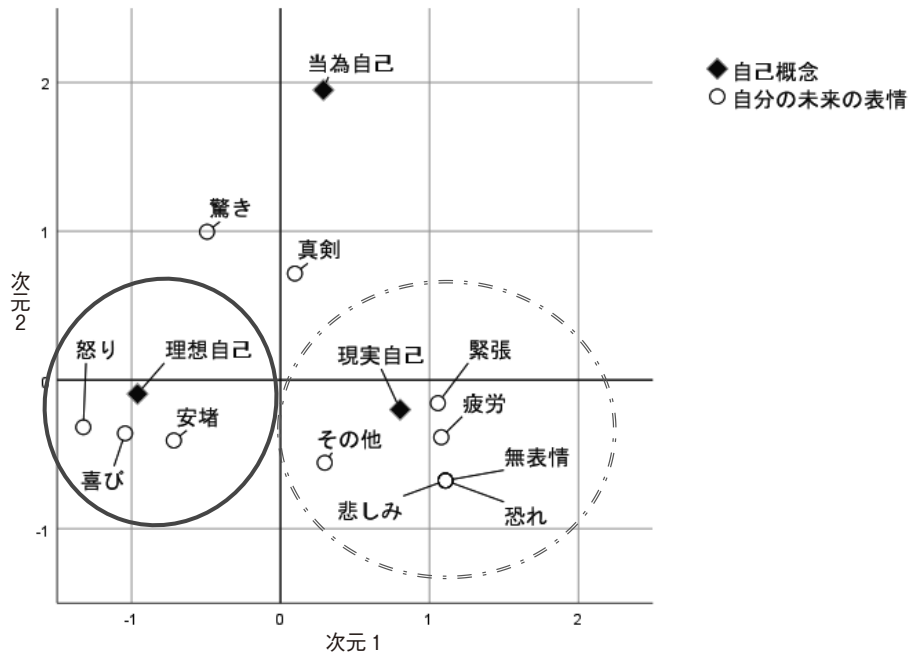


図2 自分の未来の表情（行）と自己概念（列）の同時布置図

3. 5 キャリア意思決定尺度

本調査で使用したキャリア意思決定尺度（清水・花井，2007，2008）は，決定不安，不決断，葛藤，モラトリアム，相談希求，逃避，障害不安の7つの下位尺度からなる尺度であることから，主因子法プロマックス回転による確認的因子分析を固有値 ≥ 1.0 を基準として行った。その結果，まずは，キャリア意思決定尺度（清水・花井，2007，2008）と同じ6つの因子（第1因子10項目：決定不安・不決断，第2因子5項目：葛藤，第3因子5項目：モラトリアム，第4因子5項目：相談希求，第5因子5項目：逃避，第6因子5項目：障害不安）が抽出された。そして，第1因子の10項目：決定不安・不決断についてのみ主因子法プロマックス回転による確認的因子分析を固有値 ≥ 1.0 を基準として行った結果，2つの因子（第1因子5項目：決定不安，第2因子5項目：不決断）が抽出され，全体で7つの因子が抽出された。このような段階的に因子分析を行う手法については，キャリア意思決定尺度（清水・花井，2007，2008）の7因子の抽出法と同様の結果であった。また，各因子の α 係数から決定不安（ $\alpha = .921$ ），不決断（ $\alpha = .919$ ），葛藤（ $\alpha = .916$ ），モラトリアム（ $\alpha = .902$ ），相談希求（ $\alpha = .829$ ），逃避（ $\alpha = .870$ ），障害不安（ $\alpha = .842$ ）の全ての α 係数が.800を超えていることから信頼性は高い尺度と判断できる。また，各下位尺度を潜在変数とした仮説的モデルを作成して確認的因子分析を行った結果，概ね十分な適合度（ $IFI = .930$ ， $CFI = .927$ ， $RMSEA = .063$ ）が示され，因子的に妥当な尺度と判断できる。

本研究におけるキャリア意思決定尺度（清水・花井，2007，2008）の最小値，最大値，平均値，標準偏差，歪度，尖度は表2に示す通りであった。このうち，逃避については平均値が低く床効果が認められ，歪度は正の方向に歪んだ分布を示していた。また，モラトリアムについて尖度は正規分布に比べて相対的に扁平な分布を示していた。

表2 キャリア意思決定の記述統計量

	α	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差	歪度	尖度
キャリア意思決定								
決定不安	.921	168	5	22	14.381	4.426	-.584	-.383
不決断	.919	168	5	20	9.661	3.912	.462	-.644
葛藤	.916	168	5	20	9.988	4.001	.358	-.676
モラトリアム	.902	168	5	20	12.429	4.615	-.058	-.980
相談	.829	168	5	20	12.583	3.721	-.269	-.284
逃避	.870	168	5	15	7.756	3.014	.794	-.595
障害不安	.842	168	5	20	13.744	3.924	-.551	-.236

3. 6 職業人イメージがキャリア意思決定に与える影響

コレスポネンス分析の結果得られた職業人イメージ（理想的職業人イメージ，当為的職業人イメージ，現実的職業人イメージ）を独立変数（ダミー変数），キャリア意思決定を従属変数とする強制投入法による重回帰分析を行った。重回帰分析の結果は表3のようになり，キャリア意思決定尺度の2つの下位尺度において分散分析F値により有意であった（不決断： $F(2, 165) = 4.695, p < .01$ ，モラトリアム： $F(2, 165) = 5.474, p < .01$ ）。職業人イメージのうち理想的職業人イメージについては，不決断（ $\beta = -.201, p < .05$ ），モラトリアム（ $\beta = -.222, p < .01$ ）に負の影響を与え，当為的職業人イメージについては，不決断（ $\beta = -.235, p < .01$ ），モラトリアム（ $\beta = -.248, p < .01$ ）に負の影響を与えていた。また，すべての重回帰分析において多重共線性は認められなかった。

3. 7 未来自己イメージがキャリア意思決定に与える影響

コレスポネンス分析の結果得られた未来自己イメージ（理想未来自己イメージ，現実的未来自己イメージ）を独立変数（ダミー変数），キャリア意思決定を従属変数とする強制投入法による重回帰分析を行った。重回帰分析の結果は表4のようになり，キャリア意思決定尺度の5つの下位尺度において分散分析F値により有意であった（決定不安： $F(2, 165) = 6.511, p < .01$ ，不決断： $F(2, 165) = 8.780, p < .001$ ，モラトリアム： $F(2, 165) = 4.388, p < .05$ ，逃避： $F(2, 165) = 13.076, p < .001$ ，障害不安： $F(2, 165) = 3.657, p < .05$ ）。未来自己イメージのうち現実的未来自己イメージについては，決定不安（ $\beta = .245, p < .001$ ），不決断（ $\beta = .287, p < .01$ ），モラトリアム（ $\beta = .230, p < .01$ ），逃避（ $\beta = .413, p < .001$ ），障害不安（ $\beta = .233, p < .01$ ）に正の影響を与えていた。また，すべての重回帰分析において多重共線性は認められなかった。

4 考察

4. 1 職業人イメージ

職業イメージについて，大学生は「自由な，楽しそうな，頑張っている，収入のある」といったポジティブなイメージを理想的と考え，「多忙な，大変な，働いている，苦労している，疲れている，ストレスのある，通勤している」といったネガティブで無動機的なイメージを現実的と考え，「責任のある，しっかりしている，テキパキしている，自立している」といった職業人としてあるべき姿に関連したポジティブなイメージを当為的と考えていることが明らかになり，現実を厳しいものとしてイメージしていることが明らかになった。このように現実を厳しいものとしてとらえる傾向がある理由としては，バブル崩壊後の1993～2005年の「就職氷河期」，リーマンショックや東日本大震災後の2010～2013年の「新就職氷河期」と言われる時代は終わったものの経済的な低迷から脱出したと実感できない状況にあることや，本研究の被調査者は1991年以降の経済的な低迷期に生まれ育っていることが影響を与えていると考えられる。

4. 2 自己未来イメージ

自己未来イメージについて，大学生は「安堵，喜び，怒り」といったポジティブなイメージを理想的と考えていることが明らかになった。怒りの表情が理想的自己未来イメージに含まれたことについては，自分の感情を表現できることを理想自己と捉えたものと考えられる。次に，自分の未来の表情「悲しみ，無表情，恐れ，嫌悪，疲労，緊張」といったネガティブで受動的なイメージを現実的と考えていることが明らかになった。このように現実を厳しいものとしてとらえる傾向がある理由としては，本研究の被調査者は1991年以降の経済的な低迷期に生まれ育っていることから，経済的な低迷を現実として捉え，自分の未来と結びつけていることが考えられる。また，「真剣」については，理想自己・当為自己・現実自己の中間に位置し，「驚き」については，理想自己・当為自己の中間に位置し，生き抜くために「真剣」と「驚き」を大切な姿勢として捉えていることが考えられる。

4. 3 職業人イメージがキャリア意思決定に与える影響

職業人イメージ（理想的職業人イメージ，当為的職業人イメージ）が，キャリア意思決定尺度の2つの下位尺度（不決断，モラトリアム）に負の影響を与えていることから，理想的職業人イメージや当為的職業人イメージは，キャリア意思決定場面で決断できない傾向やモラトリアム傾向を抑制することが明らかになった。このような結果になった理由としては，理想的職業人イメージ，当為的職業人イメージともにポジティブなイメージであることが，不決断やモラトリアム傾向を抑制すると考えられる。このことから，理想的職業人イメージや当為的職業人イメージを

表3 職業人イメージがキャリア意思決定に与える影響

従属変数	キャリア意思決定													
	決定不安		不決断		葛藤		モラリアム		相談希求		逃避		障害不安	
	F	p	F	p	F	p	F	p	F	p	F	p	F	p
分散分析	2.642	n.s.	4.695	**	.218	n.s.	5.474	**	.279	n.s.	2.712	n.s.	1.392	n.s.
R ² 乗	.031		.054		.003		.062		.003		.032		.017	
	標準偏回帰係数													
理想的職業人イメージ(ダミー変数)	β	p	β	p	β	p	β	p	β	p	β	p	β	p
	-.187	*	-.201	*	.002	n.s.	-.222	**	-.020	n.s.	-.174	*	-.139	n.s.
当為的職業人イメージ(ダミー変数)	β	p	β	p	β	p	β	p	β	p	β	p	β	p
	-.136	n.s.	-.235	**	-.050	n.s.	-.248	**	-.064	n.s.	-.163	n.s.	-.092	n.s.
現実的職業人イメージ(ダミー変数)	β	p	β	p	β	p	β	p	β	p	β	p	β	p
	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

p<.05, **p<.01, ***p<.001

表4 未来自己イメージがキャリア意思決定に与える影響

従属変数	キャリア意思決定													
	決定不安		不決断		葛藤		モラリアム		相談希求		逃避		障害不安	
	F	p	F	p	F	p	F	p	F	p	F	p	F	p
分散分析	6.511	**	8.780	***	.708	n.s.	4.388	*	.915	n.s.	13.076	***	3.657	*
R ² 乗	.073		.096		.009		.050		.011		.137		.042	
	標準偏回帰係数													
理想的未来自己イメージ(ダミー変数)	β	p	β	p	β	p	β	p	β	p	β	p	β	p
	-.046	n.s.	-.043	n.s.	-.105	n.s.	.012	n.s.	.118	n.s.	.114	n.s.	.077	n.s.
現実的未來自己イメージ(ダミー変数)	β	p	β	p	β	p	β	p	β	p	β	p	β	p
	.245	***	.287	**	-.037	n.s.	.230	**	.079	n.s.	.413	***	.233	**

p<.05, **p<.01, ***p<.001

抱くことができるようなキャリア教育を工夫することが重要と考えられる。

4.4 未来自己イメージがキャリア意思決定に与える影響

未来自己イメージ（現実的未来自己イメージ）が、キャリア意思決定尺度の5つの下位尺度（決定不安、不決断、モラトリアム、逃避、障害不安）に正の影響を与えていることから、現実的未来自己イメージはキャリア意思決定場面で、決定に対して不安を感じる傾向や決断できない傾向、モラトリアム傾向や職業について考えることからの逃避傾向、障害乗り越えることについての不安傾向を促進することが明らかになった。このような結果になった理由としては、現実的未来自己イメージがネガティブイメージであることが、キャリア意思決定への不安を高め、不決断・モラトリアム・逃避傾向を高めたと考えられる。このことから、ネガティブイメージである現実的未来自己イメージを抑制することができるレジリエンスⁱⁱやキャリアアダプタビリティⁱⁱⁱ（Savickas, 2005）ⁱⁱⁱを高めることができるようなキャリア教育を工夫することが重要と考えられる。

4.5 本研究の成果と課題

職業人イメージに関わる先行研究では、描画法を用いた大学生の社会人・サラリーマンに関する研究（上瀬, 2008）、社会人イメージに関わる研究（山田, 2009）があったが、描画法という点で読み解きが難しい面があった。他方、自己未来イメージに関する研究においても、9分割統合絵画法を用いた自分の未来イメージに関わる研究（松田, 2007）、4分割描画法を用いた自分の未来イメージに関わる研究（山田, 2013）があったが、こららも描画を読み解く必要があり、その分析において難しい面があった。このような読み解きを簡略化を図ることを目的に、先行研究で得られたデータを基調として、本研究においてテキストを選択するといった手法の職業人イメージ尺度や自己未来イメージ尺度を作成できたことは大きな成果と考える。

今後の課題としては、理想的職業人イメージや当為的職業人イメージを抱くことができるようなキャリア教育について検討を進めること、ネガティブイメージである現実的未来自己イメージを抑制することができるレジリエンスやキャリアアダプタビリティとの関係性を明らかにし、それらの能力を促進するキャリア教育について検討を進めることが重要と考えられる。

引用文献

- Bonanno, G. A. (2004). Loss, Trauma, and Human Resilience: Have We Underestimated the Human Capacity to Thrive After Extremely Aversive Events?, *American Psychologist*, 59(1), 20-28.
- Denis, M. (1989). *Images et cognition*; Paris: PUF.
- （ドゥニ, M. 大久保政憲・兵藤宗吉・寺内礼・富田正二・三上典生（訳）(1989) イメージの心理学－心像論のすべて 勁草書房）
- Ekman, P. & Friesen, W. V. (1975). *Unmasking the face*, Prentice, Hall, Inc.
- （エクマン, P., フリーゼン, W.V. 工藤 力（訳）(1987). 表情分析入門 誠信書房）
- Higgins, E.T. (1987). Self-discrepancy: A theory relating self and affect, *Psychological Review*, 94, 319-340.
- 上瀬由美子 (2008). 大学生が抱く社会人・サラリーマンステレオタイプに関する予備的研究－描画を用いた検討 情報と社会, 18, 1-10.
- 松田美登子 (2007). 大学生における未来イメージと不安との関連性－九分割統合絵画法による「未来の私」を中心に 臨床描画研究, 22, 169-186.
- 文部科学省 (2004). キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書「児童生徒一人一人の勤労観・職業観を育てるために」
- 文部科学省 (2011). 中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」
- Savickas, M. L. (2005). The theory and practice of career construction S.D. Brown, R.W. Lent (Eds.), *Career development and counseling: Putting theory and research to work*, Hoboken, NJ: Wiley, pp.42-70.
- Shepard, R. N. (1978). Externalization of mental images and the act of creation. In B. S. Randhawa & W. E. Coffman (Eds.), *Visual learning, thinking and communication*. New York: Academic Press.
- 清水和秋・花井洋子 (2007). キャリア意思決定尺度の開発：その1：大学生を対象とした探索的因子分析からの尺度構成, 関西大学社会学部紀要, 38, 97-118.
- 清水和秋・花井洋子 (2008). キャリア意思決定の安定性と変化そして不安との関連－大学1・2年生を対象とした半年間隔での縦断調査から－, キャリア教育研究, 26, 19-30
- 豊田秀樹・秋田喜代美・無藤隆 (2011). 質的研究の理論的サンプリングにおける理論的飽和度（自主企画）, 日本教育心理学

会第53回総会発表論文集, pp.624-625.

山田智之 (2009). 描画法による中学生の社会人に対するイメージに関する研究, キャリアデザイン研究, 5, 83-99.

山田智之 (2013). 中・高・大学生における未来イメージの相違, キャリアデザイン研究, 9, 79-91.

山田智之 (2016). 中学校3年生のライフキャリアイメージと自律的学習動機の関係, 上越教育大学研究紀要, 35, 117-126.

ⁱキャリア意思決定尺度

決定不安

- ・職業決定のことを考えると, 不安を感じる
- ・就職先を決めることのむずかしさを考えると不安になる
- ・将来, 職業を決めることがうまくいかどうか不安である
- ・将来の職業のことを考えると気が滅入ってくる
- ・将来の職業を決めることに対して不安がある

不決断

- ・自分に何が向いているかわからないので, 職業を決められない
- ・自分の能力や適性がよくわからないので, 将来の職業が決まらない
- ・自分が, 職業として, どのようなことをやりたいのかわからない
- ・どのようにして職業を決めればよいか漠然としていてわからない
- ・自分の興味や関心がよくわからないので, 将来の職業が決まらない

葛藤

- ・魅力ある職業がいくつもあるので, 将来の職業を決められない
- ・職業の選択肢がたくさんあるので, 迷ってしまう
- ・可能性のある将来の職業がたくさんあるので, どれにしたらよいかかわからない
- ・いろいろなことに興味があるので, どの職業を選んだらよいかかわからない
- ・いろいろ考えすぎて, どの職業を選べばよいかかわからない

モラトリアム

- ・就職しないでいつまでも今の状態でいられたらいいのと思う
- ・いつまでも仕事をしないで遊んで暮らせたらいいのと思う
- ・何もせずに, 今のままでいたい
- ・職業のことなど考えずに, 自分の好きなことに集中していたい
- ・将来, 職業につかずに, 好きなことをしていたい

相談希求

- ・将来の職業について, 誰かと相談をしたい
- ・職業選択の問題は重要なことなので, 誰かと相談したい
- ・自分一人で何かを決めた経験が少ないので, 誰かにアドバイスを求めたい
- ・今までも重要な問題は親などと相談してきたので, 職業選択の問題でも相談したい
- ・自分一人で何かを決めた経験が少ないので, 将来の職業について, 誰かと相談をしたい

逃避

- ・いままであまり職業のことをまじめに考えたことがない
- ・将来の職業のことを真剣に考えたことがない
- ・将来の職業については, 考える意欲が全くわかない
- ・自分が将来どうなるか分からないのだから, いま職業のことを考えても, 意味がないと思う
- ・将来のことはわからないから, 職業のことは考えたくない

障害不安

- ・将来の職業についての希望は明確なのだが, 採用試験に自信がない
- ・具体的な将来の職業を考えているが, 採用試験が心配である
- ・思わぬことで希望する職業につくことができないかもしれないと不安である
- ・何かの影響で希望する職業につくことができなくなるのではないかと心配になる
- ・希望する職業はあるのだが, これが最良なのかどうか不安である

ⁱⁱレジリエンス (Resilience) とは「回復力」「復元力」あるいは「弾力性」と訳される物理学や生態学で用いられた用語であり, 近年では, 精神医学・心理学の分野においても「極度の不利な状況に直面しても, 正常な平衡状態を維持することができる能力 (Bonanno, 2004)」という定義が用いられるようになった用語である。

ⁱⁱⁱ現在及び今後のキャリア発達課題, 職業上のトランジション, ト라우マに対処するためのレジリエンス及びリソースのこと (Savickas, 2005)。Savickas (2005) は, これを構成する4つの次元として, 「関心」(concern), 「統制」(control), 「好奇心」(curiosity), 「自信」(confidence) をあげている。

Effects of workers' image and future self-image on career decision-making

Tomoyuki YAMADA *

ABSTRACT

Effects of students' image of workers and future self-image on career decision-making were examined. Results indicated that a positive image of workers decreased students' choice anxiety, indecision, and moratoriums. In contrast, a negative future self-image increased choice anxiety, indecision, moratoriums, evasion, and sensitivity to barriers. Results suggest that providing students career education to develop an appropriate image of workers and a positive future self-image is important for appropriate career decision-making.

Key words

Image of workers, Future self-image, Career decision-making